

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

# 万葉の川心 第29回

横浜市立綱島小学校教諭 船田 園子

いまだ国を勤へぬ譬喩歌（巻第十四 三四一九番歌）

遠江引佐細江の溼標

吾を頼めてあさましものを

右の一首は、遠江国の歌

夏が静かに終わった。いつから夏でどこまで夏がよく分らないが、今年の夏はもう終わった気がした。夏はいつも一瞬の花火のようにやってくる。自分のためにだけに、やりたいことを思いっきりやりたくて、それができそうで、特別に思える「夏」。花火は確かにきれい上がった。夢のようで、一瞬で、ときどきして、そして、消えた。夏が散ったあとには、ただ余韻だけが髪や肌に残っている。昼下がりのオープンカフェはさすがにまだ暑い。写真を見ながら旅の思い出を語り合う友人たちの中で、さつきから一人、夏のことを考えていた。

「旅はいいよね。だけど、次の楽しみをみつけないきゃ。」  
そうね・・・とつぶやきながら、なぜか「次の旅・次の夏」には気持ちが動かなかった。休みはまたやってくる。だが、自分の中の花火は終わった。そんな気がしていた。

琵琶湖のことを「近つ淡海」というのに対し、浜名湖を「遠江」という。「遠江の引佐細江の溼つくしのように、わたしを頼らせておいて、やがて心浅くなり私を疎ましく思うでしように。」溼は「水の緒」の意で、河や海の中で船の通行に適する底深い水路のことである。溼つくしは「溼の串」の意で、それを知らせるための杭のことである。柱の上に三角を形どったものを打ち付けており、浜名湖東北の気質という土地に模様が立っている。そこには、日本最古の海路標識としてここより南約三百五十米都田川河口に浅瀬を知らせるために立てられたもの

と由来が書かれていた。一支湖は引佐細江と呼ばれ浜名湖の本湖とは分けられている。ここは都田川、井伊川が合流して浜名湖に注ぐところで、昔は細い入り江であつたらしい。溼つくしは「身を尽くし」とも重ねられ和歌に詠まれた。万葉集では歌に詠まれて紹介されるほど、溼つくしがこの土地の特色あるものであつたと思われる。浅瀬に頼りの溼つくしだがそれもかなわず乗り上げる。「あなたの言葉を胸を信じていいのでしょうか。」愛してもまた離れていくのでは・・・。深い想いをかけるほど相手の心が浅くなる。それでもこの恋を頼みにしてしまう。想いを寄せてしまつのは今も昔も変わらない。流れのままに、心のままに。写真の石碑は、静岡県引佐郡細江町気質の細江公園「文学の丘」に、浜名湖を見つめて立っている。

今まで口を閉ざしていたひとりが、ぼつりと言った。

「旅だけにこだわらずに、毎日を楽しめたらいいのに。」

何かを楽しみにして生きる生き方と、毎日を楽しむ生き方。

「毎日の些細なことを楽しむなんて」「無理よと言いかけた。だが、秋はこれから始まる。自分に無理のない生き方で、毎日を楽しめたなら。苦しい恋も、仕事の山も、人生も、過程を楽しめたなら。頼れる道標はない。誰も言葉を続けなかった。オープンカフェのそのテーブルだけ、ほんの少し時が止まった。



静岡県引佐郡細江町気質 細江公園にて